

かしこいクルマの使い方
Vol.3
藤井 聡



クルマ10分、二酸化炭素
1キログラム。

「地球環境の問題」。最近よく耳にする言葉ですね。どうやら、私たちの暮らしの中で二酸化炭素・CO₂なるものが出ていて、それが原因で「地球温暖化」が進行しているらしい。

この問題について、次のようにお考えの方がいるかも知れません。「CO₂を出さないように心がける事は必要。でも、私ひとりくらい、どうしようがあまり関係ない」。まさにその通り。世界中がCO₂を大量に出し続けている中で、自分だけがCO₂を出さなくても温暖化はとまりません。逆に、世界中がCO₂を出さない生活を営んでいる中で、自分一人だけCO₂を大量に出しても温暖化は生じません。

しかし、この問題が本当に深刻なのは、まさに、この「私ひとりくらい……」の心理があるからなのです。「私ひとりくらい……」と皆が考えるから、

暮らしの中のCO₂排出量は増え続け、その結果、地球温暖化は徐々に進んでいきます。

世界中の様々な研究機関はこの問題についてのいろいろな研究を重ねて来ました。問題を一発で解決する「新技術や新しいタイプの政治・経済システムはないか、等々。その結果、最も効果的な方法は、次のような方法であることが明らかにされています。つ

「皆が、少しずつ環境に配慮するようにすること」
何とも当たり前ですが、どうやら、こうした正直な方法が一番必要とされているようです。

だとすれば、例えば「私ひとりだけでも……」と考えて、少しずつCO₂を減らす工夫をすることは、無駄なことではないかもしれませぬ。

例えば、クルマ利用を10分使えば、平均で約1キログラムのCO₂が排出されます。1キロといえば、ちょうど1リットルのペットボトルのジュースを買った時の重さです。ちなみに、クルマの無い世帯で排出されるCO₂は平均で1日約4キログラム。お風呂やエアコンを我慢するより、クルマをほんの少し減らす工夫をする方が、無理なく、CO₂を減らせるかもしれまへんなあ……。

△ふじい・さとし△

東京工業大学助教授。1968年奈良県生、京都大学卒業。フジテレビ「交通バラエティ・日本の歩き方」2003～2004年を監修・出演。JAFMATE「交通百葉箱」2001～2002年に連載。

世界バス紀行



中村 文彦

小さなバスはお洒落です

さて、今回は、小さなバスです。龍ヶ崎市のコミュニティバスも、通常のバスと比べたらかなり小さいですが、小さいバスにもいろいろあります。幼稚園の送迎などに用いられるマイクロバスがその典型です。乗合の路線バスで、さらに、これからの時代ということで、車内に段差のないバスというのは、実はそれほど例がありません。

龍ヶ崎市で走っているクセニッツという会社が製作した車体(足回りはフォルクスワーゲン)は、日本では1998年に金沢市で初めて輸入されたものです。金沢市長のたつての希望で、世界でいちばん素敵なミニバスを、ドイツそしてオーストリアまで行って買い付けてきたというものです。その後、このクセニッツの車両や、同サイズのスウェーデン製の車両が日本のいくつかの都市で走り始めました。この時点では対応する国産車両はありませんでした。その後、トヨタ系列の日野自動車フランスの自動車会社ブジョーのミニバスの足回りをを用いて、国産の車体を載せたポンチョという車両が販売され、価格の低下とともに普及が進みました。でも準国産でした。完全に国産の車両が街中にお目見えするまでにはもう少しだけ時間がかかります。

日本では、定員10人以下の車両をバスと呼ぶことができずにタクシーと呼ばれます。そんな規制を気にしないのであれば、クセニッツのもので写真のように定員8名程度のものもあります。見栄えはいまひとつですが、タイのバンコクの横丁を走るシーローレック(四輪小型というタイ語)は、機能としては6人乗りのバスです。軽トラックをベースとしていますから、幅8mの道路ならそこでUターンができたりする優れたものです。

自動車会社はビジネスとして成り立つかどうかという点で、いまひとつ及び腰ですが、小さいバスは、日本のように道の狭い、それでいて決して高密度ではない郊外地域の日中の足の確保としてはなかなかよいものにみえるのですが、どうでしょう。次回はバス停のお話です。



ドイツの8人乗りバス車両



タイの6人乗りバス?車両

中村 文彦 (なかむら ふみひこ)

横浜国立大学大学院環境情報研究院教授、
東京大学卒業。専門は都市計画、都市交通
計画、公共交通政策など